

山頭火ふるさと館報

第10号
令和5年4月

新たなステージへ 参加から参画へ

一般社団法人防府観光コンベンション協会
山頭火ふるさと館
館長 中村 浩典

陽春の柔らかな風を受けて満開の桜から一片二片と花びらが舞う季節となりました。この華やいだ季節を迎え、皆様にはますますご清祥にてお過ごしのことと拝察いたします。

昨年は、防府の生んだ漂泊の俳人「種田山頭火」生誕一四〇年及び「山頭火ふるさと館」開館五周年を記念し、特別企画展「山頭火と芭蕉・良寛く尊敬した先人たち」を開催しました。山頭火の句作や生き方に影響を与えたとされる松尾芭蕉や良寛に焦点をあて、直筆資料とともに紹介しましたが、市内はもとより県内外からも多くの皆様にご来館いただき、厚くお礼を申し上げます。併せて特別企画展期間中には、山頭火ふるさとまつりや記念講演会・句会等の関連行事、さらには入館者十万人達成セレモニーを開催することができ、この五年間を

総括するにふさわしい充実した年になりました。

今振り返りますと、企画や運営等、私たちがスタッフにとっては初めて経験することが多く、試行錯誤しながらのスタートでしたが、各方面からのお力添えを賜り、盛会裏に終えることができました。お世話になりました皆様方に深く感謝申し上げます。これは山頭火の頭彰・継承をめざす文学館として一歩前進できたことは言うまでもなく、私もスタッフのスキルの向上にもつながったと確信しております。

開館六年目を迎えた今、山頭火ふるさと館は新たなステージに突入しました。これまで以上に種田山頭火及びその句の魅力を発信していくためのキーワードは、「参加から参画へ」と捉えています。共に山頭火を学び、句を味わい、良さを共有する中で、山頭火頭彰・継承の担い手を育むべく、来館者のニーズに応じた取組を展開していくこと。これが当館に与えられたミッションであると考えます。

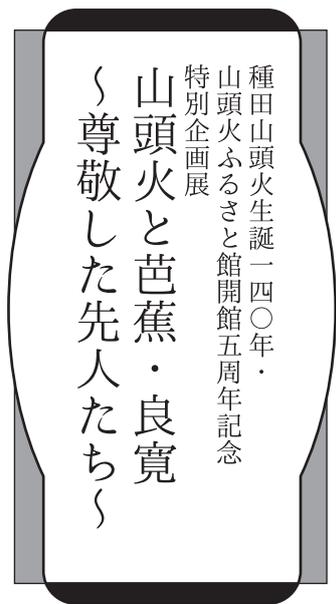
これからも「様々な層に親しまれ、愛される文芸の拠点」、「山頭火を柱とした、つながり・交流の拠点」として、訪れる人の心を豊かにする経営をめざしてまいりますので、山頭火ふるさと館への変わらぬご支援、ご協力

目次

館長挨拶	1
特別企画展 山頭火と芭蕉・良寛 く尊敬した先人たち	2
山頭火ふるさとまつり	3
生誕一四〇年記念講演会・句会	4
寄稿 種田山頭火生誕百四十年を 迎えて	7
企画展	7
防府市内山頭火頭彰の歴史	7
令和四年度書道コンクール	8
第五回自由律俳句大会	9
山頭火カルタで書き初め大会	9
今月の一句アーカイブ	10
図書・資料受け入れ報告	10
くずし字ワークショップ	11
収蔵資料紹介	11
今後の企画展情報	12

を賜りますようお願い申し上げます。

なお、現企画展「防府市内山頭火頭彰の歴史」を終えますと、四月十四日から企画展「俳句を聴く 山頭火とオノマトペ」を開催します。オノマトペとは擬音語・擬態語を意味しますが、この技法を巧みに使った山頭火の句や、音を効果的に使った情景や心情をより感覚的に伝えている句などを紹介し、これまでの企画展とは少し趣の異なる内容を味わっていただきたいと考えております。併せて、今回は各自のスマートフォンを活用し、自由律俳句を聴いて楽しむ仕掛けも取り入れておりますのでぜひともご覧いただけますようご案内申し上げます。詳しくは当館ホームページをご覧ください。



種田山頭火生誕一四〇年・
山頭火ふるさと館開館五周年記念
特別企画展

山頭火と芭蕉・良寛 〜尊敬した先人たち〜

会期 前期：令和四年九月四日(日)
〜十月二日(日)

後期：令和四年十月七日(金)
〜十二月五日(月)

種田山頭火生誕一四〇年。山頭火が生きていた時代から長い時間が経った今も、その句は新鮮さを失っていません。その背景には実は、山頭火よりさらに前の時代を生きた先人たちへの意識がありました。

中でも、漂泊の俳人として句も愛読していた松尾芭蕉や、禅僧として意識していた良寛については、特によく思いを馳せています。彼らの句や生き方から山頭火がどのように影響を受けていたのか、貴重な直筆の資料とともに紹介しました。

企画展開催にあたり、以下の方々にご協力いただきました。謹んで謝意を表します。(敬称略、順不同)

- 芭蕉翁記念館
- 公益財団法人芭蕉翁顕彰会
- 公益財団法人柿衛文庫
- 大垣市奥の細道むすびの地記念館
- 良寛記念館
- 護国寺

一、旅する俳人種田山頭火のめざしたもの
昭和十一年の『旅日記』年頭所感では、「芭蕉」「良寛」という二人の先人の名を挙げています。彼らを敬愛し憧れるからこそ、彼らを模倣するのではなく自分は自分らしく生きるのだという覚悟が伺えます。

二、山頭火の旅

山頭火は、小郡(現山口県山口市)に住んでいる時期に、東日本方面へ何度か旅をしています。特に昭和十一年の旅では平泉まで足を延ばしており、芭蕉の『奥の細道』を意識していたと考えられます。

三、荻原井泉水とめぐる『奥の細道』

山頭火の師・荻原井泉水は、芭蕉の研究にも力を入れていました。今回は、井泉水が『奥の細道』をたどる旅で実際に見聞したことをもとに、芭蕉が訪れた各地を解説している短冊を展示しました。

四、山頭火の旅 句で味わう

分け入つても分け入つても青い山
「大正十五年四月、解くすべもない惑ひを背負うて行乞流転の旅に出た」という前書きがあるこの有名な句は、行乞の旅を始めた頃に詠んだものです。このほか、山頭火が旅の中で詠んだ句の直筆資料を展示しました。

五、漂泊の俳人 芭蕉と山頭火

芭蕉は江戸に出て宗匠(俳諧の指導者)となるも、隠居し門人たちに支えられながら俳諧一筋に生きます。山頭火もまた、俳句と旅に生きました。その背景には詩人として流浪する覚悟と先人たちへの憧れが見えます。

六、清貧の僧 良寛と山頭火

山頭火と良寛の人生には重なる点がいくつかあります。山頭火は、清貧な生活の中で詩や歌、書等の芸術を生み出した良寛に尊敬の念を抱いたのではないのでしょうか。

【展示資料一覧】

- 前期 ●後期 ◎通期 所蔵者未記載は当館蔵
- ◎『名家俳句集』塚本哲三編・有朋堂書店・昭和五年三月
- ◎『改訂芭蕉選集』荻原井泉水・春秋社・昭和八年二月
- ◎『複製版 良寛遺墨集』新潟県良寛会・昭和五十五年
- ◎『個人蔵』○短冊「沖の石末の松山(荻原井泉水)」○短冊「松島(荻原井泉水)」○短冊「松島(荻原井泉水)」○短冊「松島(荻原井泉水)」○短冊「鶴岡(荻原井泉水)」○短冊「出雲崎(荻原井泉水)」○短冊「あらうみ(荻原井泉水)」○短冊「親不知子不知(荻原井泉水)」○短冊「大垣(荻原井泉水)」○池原魚眠洞宛てハガキ(種田山頭火・昭和九年三月二十九日)○池原魚眠洞宛てハガキ(種田山頭火・昭和十一年三月二十五日)○第五句集『柿の葉』(種田山頭火・昭和十二年)○池原魚眠洞宛てハガキ(種田山頭火・昭和十四年四月二十一日)○短冊「分け入つても分け入つても青い山(種田山頭火)」○短冊「秋空たゞよう雲の一人となる(種田山頭火)」○短冊「これから旅も春風の行けるところまで(種田山頭火)」○掛軸「春風の鉢の子一つ(種田山頭火)」○掛軸「鉢の中へ霞(種田山頭火)」○掛軸「着虬贊芭蕉翁像(蒼虬)伊賀市蔵」○掛軸「華咲て等五句発句切(松尾芭蕉)芭蕉翁顕彰会蔵」○『笈の小文』(乙州編・宝永六年刊)柿衛文庫蔵
- 掛軸「たび人と我が名よばれん初しぐれ(松尾芭蕉)芭蕉翁顕彰会蔵」○掛軸「初しぐれ猿も小巻をほしげ也(香雲画・閑樵贊)伊賀市蔵」○短冊「装束復製」ふる池や蛙飛込水のおと(松尾芭蕉)柿衛文庫蔵
- 掛軸「分け入れれば水音(種田山頭火)」○短冊「あはれしれ俊乗坊の菓喰(路通)柿衛文庫蔵」○『俳諧勸進帳』上路通編・元禄四年写)柿衛文庫蔵
- 『おくのほそ道』(寛政元年刊)伊賀市蔵
- 掛軸「おもしろの翁や芭蕉坐像(蓼太)奥の細道むすびの地記念館蔵
- 掛軸「たび人と」謡前書付句画賛(東藤画・芭蕉贊)奥の細道むすびの地記念館蔵
- 『猿蓑』(去来、凡兆編)元禄四年刊)奥の細道むすびの地記念館蔵
- 短冊「うしろ姿のしぐれてゆくか(種田山頭火)護国寺蔵」○掛軸「うしろ海や」句文懷紙(松尾芭蕉)奥の細道むすびの地記念館蔵
- 『芭蕉翁行状記』路通編)奥の細道むすびの地記念館蔵
- 掛軸「良寛像(遍澄画)良寛記念館蔵」○掛軸「此花散後 更無花(良寛)良寛記念館蔵」○掛軸「そめいろのおとづれつげよよるのかり(良寛)良寛記念館蔵」○掛軸「良寛戒語」ものいふに(良寛)良寛記念館蔵
- 『おくのほそ道』(寛政元年刊)奥の細道むすびの地記念館蔵

山頭火ふるさとまつり

開催期間 令和四年十月七日、八日、九日

特別企画展の開催期間中に山頭火ふるさと館開館五周年を記念して、山頭火ふるさとまつりを開催しました。山頭火ふるさと館開館日の十月七日から三日間、大人から子どもまで楽しめる八つのイベントを行いました。

十月七日

◆開館五周年記念 山頭火タンブラー配布

◆ふるさとシアター特別上映

◆うめてらすコラボイベント

初日は当館の開館日を記念して、山口県立防府商工高等学校の生徒たちが総合実践で作製したオリジナルグッズを先着二〇〇名の来館者に配布しました。今回お配りしたのは、ガラスに砂鉄を吹き付けて模様を描く手法を用いて作った、山頭火のシルエットと俳句があしらわれたタンブラーです。全部で6種類あり、二日目に配布終了しました。



▲山頭火タンブラー

また、交流室ではふるさとシアター特別上映として、山頭火を題材とした創作音楽劇『きょうも隣に山頭火』(作:井上智重)を上映したほか、うめてらすではコラボイベントとしてふわふわドームを設置するとともに、特別企画展を観覧された方にプレゼントをお渡ししました。

十月八日

◆あつまれちびっ子！山頭火クイズ大会

◆くるみボタン作り

◆書道コンクール表彰式・山頭火紙しばい

二日目の午前中に「あつまれちびっ子！山頭火クイズ大会」を開催しました。山頭火や山頭火の俳句に関するマルバツ問題を出題し、正解数を競う小学生向けのクイズゲームです。参加者は八名で難易度の高い問題にも積極的に解答し、終始和やかな雰囲気でした。午後からは「くるみボタン作り」を行い、山頭火のスタンプを使ったくるみボタンを制作しました。ボタンはストラップや、ヘアゴムにつけるなど、様々なアレンジを施して楽しみました。また夕方には当館が毎年開催している、書道コンクールの表彰式を行いました。

十月九日

◆語り継ぐ山頭火

◆山頭火朗読会・詩吟く句碑巡りく

◆句碑拓本ワークショップ

三日目は大人を対象としたイベントを開催しました。「山頭火朗読会」では山口の朗読屋さんをお招きし、山頭火を題材とした絵本の朗読を披露していただきました。観客の方々にも山頭火の句を一緒に朗読していただき、会場全体が山頭火の世界に包まれました。ま

た、「詩吟く句碑巡りく」では桑誠会の皆さまをお招きし、山頭火の句碑や、山頭火にゆかりのある場所をスライドに映しながら、山頭火句を力強く吟詠していただきました。

桑誠会の皆様による「詩吟く句碑巡りく」▶

午後からは水落龍勝氏を講師に迎え、「句碑拓本ワークショップ」を行いました。拓本とは石等に彫られた文字を、墨を使って紙に写し取る技法です。今回は「へうへう」として水を味ふ「鉄鉢の中へも霰」「酔うてこほろぎと寝ていたよ」他、句集の一節の採拓に挑戦していただきました。



▼句碑拓本ワークショップ



種田山頭火生誕一四〇年
記念講演会・句会
松尾芭蕉から種田山頭火へ

日時 令和四年十一月十二日(土)
場所 ルルサス防府 多目的ホール

登壇者

講演・審査員：坪内稔典(俳人・柿衛文庫理事長)
審査員 ……富永鳩山(『群妙』主宰)

種田山頭火の生誕一四〇年の記念として、前半は坪内稔典先生による講演「山頭火と芭蕉」を行いました。ここに、その一部をご紹介します。

【「うしろすがたのしぐれてゆくか」をどのように読むか】

俳句は、作者に即して読まなければいけないものなのか。あるいは別の言い方をすれば、俳句というものは作者を離れて自由に詠んでもいいのではないか。山頭火は一貫して自分の人生、自分の暮らしを詠んでいて、それが俳句だと考えています。だから山頭火は作者を離れて詠むということを拒む、嫌がるタイプだと思います。実は俳人の多く、日本の文学者の多くはそのタイプです。ある時代までは。

明治、大正、昭和の前半くらいまでは、作者と文学作品というのはあまり離れないものでありました。けどどこどころ十数年は、むしろ作者から離れて作品は自由に詠んでいいんだという考え方がかなり広まっています。

僕も実は、若いころは作者を離れてはいけないという立場だった。作る側から言っても、僕が作ったらそれは僕が書いたから、という考え方が強かった。今日僕は坪内稔典(ネンテン)と紹介していただけてますが、作者と作品が離れてはいけないと思っていた時代は、僕は稔典(トシノリ)だったんです。戸籍上の名前。ネンテンと呼ばれるとネンテンではありませんと訂正していたんですが、中年のころになってもうこれは仕方ないのではないかと思うようになったんです。その時たまたま僕の俳句が初めて世の中で知られた。「三月の甘納豆のうふうふう」という俳句です。これがなぜか話題になつて、俳句の世界でこれはすてきな俳句だという人と、いやそれは俳句ではないという人たちが議論をして、そして僕は、作者としてはおやおやと思つて眺めてましてね。鑑賞するのもさまざまなんです。「うふうふう」とは誰が笑つたか、どんな笑い方なのか、可愛い笑い方なのか、いやらしい笑い方なのか。それで僕、作者はさまざま読み方があるんだなと実はびっくりしてました。

そうした頃に、もしかしたら俳句の中の表現というのは作者の考えとは関わりなしに読者が勝手に読むんじゃないか、と。で、それもいいのではないかと思うようになったんです。ちよつどその頃ヨーロッパの文芸評論の影響が日本に現れてきて、そして作者はもう作品を発表した途端に死んでるだろう、だからそれからの主役は読者なんだ、とかいう考え方が広まっていた、それで僕も何となくそっちの方が面白そうだと思うようになった。

そういう事情があつて、僕はその頃もうネンテンと呼ばれることも訂正しなくなつたんです。その考えを山頭火の「うしろすがたのしぐれて

ゆくか」に当てはめると、「うしろすがたのしぐれてゆくか」は山頭火という作者に即しておく必要はない。読者が受けとった時の感じ、読んだらいいんじゃないかと思えます。しぐれの時期というのは晩秋から初冬ですからちよつと寂しい時期なんです。そこに粋のいい股旅物の若者が啖呵を切っている感じ、それが「うしろすがたのしぐれてゆくか」ではないか。そうすると山頭火のイメージも変わってきます。酒に溺れた乞食同然の坊さんではなくて、もつと粋のいい旅人の姿に生まれ変わる、そういうことが可能ではないかと僕は思っているのです。



▲坪内稔典氏

【自由律俳句について】

山頭火の俳句は自由律といわれている俳句で、大正から昭和の戦前、大変流行して日本人達の心を惹きつけたんですが、太平洋戦争が終わった後から次第にあまり注目されなくなつて、今では少数の人が作る文芸になつていふんですよ。五七五の俳句は人気があるんですけど、自由律はあんまりない。なぜか。日本の詩歌は、時代を経てだんだん短くなつてきていまして、今では五七五七七の短歌と五七五の俳句が一番短いですが、それよりもさらに短さを追求していくのが自由律だったんです。時代が新しくなればなるほど詠む側も短い詩を求めてきたんですが、もしかしたらその限界みたいところに達して、それでもう自由律は、無理になつたのかと。自由律って考え方はまだ歴史的にも一〇〇年くらいしかないわけだけど、過激なある時代の運動に、もしかしたら終わつてしまうのかもしれない、という気がしているんです。

だけど、山頭火の自由律俳句は、実は定型俳句とほとんど変わらないというのが僕の考え方なんです。定型俳句はなぜ長々と続いているかという、「古池や」と言うと、古い池があります。「蛙飛び込む水の音」、蛙が飛び込んでいふ水の音がしています。二つの要素をくつつける、これが定型俳句の特色です。俳句が長く続いてきた理由はその二つの要素をくつつけて、一種の問答の形式のようにするからなんです。古池とは何だという問いかけが「古池や」、答えが「蛙飛び込む水の音」です。その構造は実は山頭火の自由律の基本的な構造でもあると思つていふんです。後ろ姿としぐれ、後ろ姿で行く人と降るしぐれ、二つの要素が感じられますね。山頭火のその他の俳句でもほとんど同じようなことが言えます。

この二つの結びつきが魅力的なものでは覚えられないんです。山頭火の句「まっすぐな道でさみしい」、僕は大好きなんですが、まっすぐな道というとなんとなく勢いが良くてさみしいとは遠い感じがする。それが、まっすぐな道で「さみしい」という思いがけないところへ持つていけるので、きつと覚えるんだと思ふんです。心にかかるんだと思ふんです。このように、実は山頭火の句は定型俳句が持つている基本的な性格と一致しているところがあつて、それに注目すべきだというのが僕の考えなんです。これは、今自由律を作つていふ人によつてみたい考えであります。

【芭蕉と山頭火】

今日のテーマは芭蕉ですね。芭蕉と山頭火を結びつけなくちゃならない、それは至難の業です。

芭蕉はものすごい大物なんです。日本人で一番外国で知られているのは芭蕉だと言われています。芭蕉と山頭火を同格に考えることはちよつと難しいかもしれない、ただ思ふんですけれども、なんか……めっちゃくちゃ言いますよ、これから。物事には上と下があるんです。芭蕉というのは上のほうの限界まで行つた人。山頭火というのは下のほうの限界にいた人。山頭火というの、人間の幅みたいなものがあつて、多くの人達、私達はだいたい真ん中にいます。そういう多くの中間の、極端な上にいるのは芭蕉、極端な下にいるのが山頭火、なのではないか。上も大事だけど実は下もとっても大事なんだ。

上の人と下の人という鮮やかな違いを示す例が、山頭火の昭和十四年の日記です。もう晩年に近い頃で、四国を行乞しています。

十一月十一日 晴、滞在。
七時—十二時、市内行乞(米四合、錢五十五錢)。
人さま多く、世さま多く。
同室四人、みなへんろさん、私もその一人。
身心のむなしさを感じる。
(略)

十一月十二日 よき晴れ、滞在。
八時から十一時まで行乞、錢四十七錢米八合。

これくらい稼ぐと一泊できるんです。山頭火の場合はこれ以上お金を持つてないんですよ、いつも。要するに日銭を稼いでくだけなんです。よね。こういう暮らしていいのはできないですよ。たぶん誰もこんな暮らしは嫌だというように暮らしをしている。

芭蕉も乞食(ゴツジキ)みたいなのを理想としていて、特別俳句以外を作るわけじゃないし、芭蕉のように自分の息子がなるって言つたら現代の親も困るだろうなあと思つたことがあるんです。山頭火でもそうなんです。山頭火のようになれと言われたら困る。そういうところがきつとあると思ふんです。そこが微妙なんです。だけど、実際には困るけども、山頭火を読むことで、人間のある種の限界みたいなことを教えてもらえる。それはとっても大事なことだと思ふんです。

山頭火の暮らしに対して、芭蕉は全然違ふんです。京都の嵯峨野にある落柿舎という所に、奥の細道の旅のあと滞在した、その時の暮らしを書いているのがこの『嵯峨日記』で、芭蕉の暮らしぶりがよくわかります。

机一、硯、文庫、白氏集・本朝一人一首・世継物語・源氏物語・土佐日記・松葉集を置、并唐の蒔絵書たる五重の器にさまざまの菓子盛、名酒一壺盃を添たり。

これが芭蕉の身の回りの品。山頭火とは全然違う。山頭火は安い宿屋で持ち物は何もありません。芭蕉はこのあと「我貧賤を忘れて清閑を樂しむ」と書いていて、貧しさを忘れて清らかな閑かさを樂しむんだという。実はこの清閑を樂しむという言葉は山頭火のお気に入り、芭蕉から習ったんだと思います。ただそのレベルが違うんですね。芭蕉はある意味で、もともと上部の方にいたとしたら、その対極に山頭火はいたと考えたらいいと思います。私たちは真ん中にいる。というふうには理解したら面白いんじゃないかなと、このごろ僕は思っているのです。どうでしょうか。



▲防府ふるさとコールによる『山頭火の句に寄せて 合唱組曲「花とふるさとと」』の披露

後半は生誕一四〇年記念句会を実施しました。事前に参加者の皆様から一四〇句のご応募をいただき、その中から優秀作品八点を選び、審査員のお二人に句評をいただきました。受賞作品と、選者による句評(一部)は以下のとおりです(「」内は句題)。

富永鳩山選

【最優秀賞】

海は大時化父ちゃんの大きな膝舟

山口県 上田 純子

句評：外が大時化ということとお父ちゃんの膝舟の対比が効果的。しかもふるさととのテーマで、俳句などにあまり出てこない「父ちゃん」を詠んでいるところが、非常にいい腕前。

【優秀賞】「しぐれ」

句読点のない雨に濡れている

山口県 内野 聖子

句評：ただの雨ではなく句読点のない、ずっと降り続けている雨に濡れている。人生で経験する困難なこと、やや挫折しそうなこと、そういうものが実感的に詩的に表現されているところが面白い。

【佳作】

供え柿一つ句碑がしぐれている

山口県 江山 豊

うれしくてませごほん

山口県 佐伯 初枝



▲富永鳩山氏

坪内稔典選

【最優秀賞】

昼の冷麦空の色

静岡県 田中 直心

句評：「昼の冷麦」と「空の色」という二つの要素が入っている。冷麦という地上のものが急に空へ広がっていく感じがする。短い表現だが晴れやかに風景を作り上げている。

【優秀賞】

雪明り赤子の寝息たしかめる

山口県 りんどう

句評：雪明かりの中で赤子が静かなのでちよつと心配になって息をしているかどうか確かめた。雪明かりの繊細な感じと赤子の命とが呼応していて素敵な作品になっている。

【佳作】

あの辺はしぐれか過去も未来もない駝鳥

山口県 藤井 ちづ子

夏が広がる一口のフルーツトマト

山口県 坂本 加代



▲坪内稔典氏

種田山頭火生誕 百四十年を迎えて

富永 鳩山

種田山頭火は明治十五年(一八八二)十二月三日に誕生し、昨年の十二月三日で生誕百四十年を迎えました。そこで、記念すべきこの年に、生誕地跡の句碑「うまれた家はあとかたもないほうたる」の文字の墨入れを行いました。まず、句意や作句した当時のお話をさせていただき、お集まりの皆さんで草取りなどの清掃を済ませ、墨入れを行いました。皆さんの献身的な作業により文字もくつきりと読みやすくなり、気持ちよく生誕日を迎えることができました。

山頭火は、十歳で母の不幸な死を経験するなどして、人間存在の不条理を意識するようになりまし。大学ではヨーロッパの自然主義文学の洗礼を受けますが、種田家の経済的傾斜と精神的不安から退学。その間、自由律俳誌『層雲』と出会い「山頭火」として出発しました。出家の後、大正十五年、一笠一鉢で始まった行乞流転の旅は、昭和十五年、松山の一草庵で亡くなるまで心身放下の旅でした。時には死を意識し、また望郷の念を抱き、孤独で過酷な現実の中で生まれた山頭火の句ですが、リズム良くやさしい言葉で一貫しています。「自然を通して自分を詠う」が山頭火の自由律俳句の哲学であり、その句境はしばしば暗示的で象徴的です。

令和四年十一月十二日、(一社)防府観光コ

ンベンション協会、山頭火ふるさと館主催による、坪内稔典氏の講演会と記念句会が行われました。そこで稔典氏は松尾芭蕉と種田山頭火について「芭蕉は上の限界に行った人で、山頭火は下の限界に行った人、：上も大事だが、下も大事である」といったお話がありました。

文学は読者が感動し評価するものであり、そこには上も下もないのです。芭蕉の句は余韻があり、山頭火の句には余情があります。二人はそれぞれ違った道を深く高く求めたのではないのでしょうか。山頭火は俳句界に一つの風穴を開け、新しい短詩型文学を展開しました、だからこそ昭和の芭蕉と称されているのです。これからも山頭火の句は時代を超えて人々に寄り添い生きる力になると信じています。

もりもり盛り上がる雲へあゆむ 山頭火



▲生誕地句碑への墨入れの様子

企画展 防府市内山頭火頭彰の歴史

会期 令和四年十二月十日(土)

〜令和五年四月九日(日)

昭和二十九年の句碑の建立に始まり、全国的な山頭火ブームとともに『山頭火ふるさと会』の活動によって盛り上がりを見せた、市内の山頭火頭彰の歴史をたどります。多くの人の奮闘によって俳人山頭火が今に伝えられてきた様子をご覧いただけます。

【主な展示資料一覧】所蔵者未記載は当館蔵

『採点表』(大正二年十一月)／『めばえ』第十卷第二号(柳義雄・芳風吟社・昭和八年二月)／『防長俳家集』(柳義雄・芳風吟社・昭和七年十二月)／短冊「孫の出新春放送みなで聴く」(柳星甫)／短冊「焼酎に酔ひ旅にあり山頭火」(河村玲波)／短冊「雨ふるふるさははだしである」(種田山頭火)／生誕一〇〇年記念種田山頭火展写真(昭和五十七年)元山頭火ふるさと会蔵／生誕一〇〇年記念種田山頭火展ポスター(昭和五十七年)／『山頭火記念句会特集 創刊号』(富永鳩山・山頭火研究会・平成元年十月)／『山頭火句碑集 第一集』(田中四郎・山頭火研究会・昭和六十年六月)／山頭火新聞 第1号(山頭火ふるさと会・平成四年)／山頭火ふるさと会設立写真(撮影 山下重子・平成四年)元山頭火ふるさと会蔵／色紙「放浪は孤なり」(伊集院静・平成六年)／色紙「ふるさとには川があつて桜がある」(高樹のぶ子・平成六年)／色紙「まっすぐな道でさみしい」(那須正幹・平成六年)／山頭火いろはかるた(防府市文化協会・山頭火ふるさと会・平成十三年四月)／市広報「ほうふ」平成十七年六月一日号(防府市)防府市蔵／『自由律俳句クラブ群妙 創刊号』(自由律俳句クラブ「群妙」平成十九年六月)／『防府の生んだ俳人山頭火』(又田竹栖・防府の文化を高める会・昭和四十八年十月)／『防府の生んだ自由律俳人山頭火』(防府市文化協会ほか・平成三十年五月)

令和四年度 書道コンクール

応募期間：令和四年八月一日～九月九日
表彰式：令和四年十月八日
審査員：小・中・高等学校教育研究会国語・書道研修部の先生方四名

市内の小学生から高校生を対象に、山頭火にちなんだ言葉課題として書道作品を募集しました。部門を五つに分け、小学校一・二年生「かさ」、三・四年生「山行水行」、五・六年生「雑草」、中学生「山頭火」、高校生「分け入つても分け入つても青い山」を書道で表現してもらいました。応募数九二三点の中から各部門、市長賞(最優秀賞)一名、教育長賞(優秀賞)一名、山頭火ふるさと館長賞(優秀賞)一名、佳作二名ずつ(高校の部一名)、計二十四名が選ばれました。また、山頭火ふるさとまつり期間内の令和四年十月八日に表彰式を行い、受賞者の皆様に山頭火を題材とした紙芝居を上演したほか、特別企画展をご観覧いただきました。

受賞者は以下のとおりです。

【小学校一・二年生の部】
 市長賞
 なかむらかずき 松崎小学校 一年
 防府市教育委員会教育長賞
 ふくだももか 右田小学校 一年
 山頭火ふるさと館長賞
 しお田ゆうき 牟礼南小学校 二年

佳作
 やまもとさつき 松崎小学校 一年
 はまもとなお 松崎小学校 二年

【小学校三・四年生の部】
 市長賞

有富美空 右田小学校 四年

防府市教育委員会教育長賞

岩崎杏菜 小野小学校 三年

山頭火ふるさと館長賞

藤野咲歩 牟礼南小学校 四年

佳作

山根祐華 華城小学校 四年

有富将志 大道小学校 四年

【小学校五・六年生の部】
 市長賞

津田瑛士 大道小学校 六年

防府市教育委員会教育長賞

縄本敦子 華浦小学校 五年

山頭火ふるさと館長賞

矢田明希 牟礼小学校 五年

佳作

田頭奏音 小野小学校 六年

宮川桔平 華城小学校 五年

【中学生の部】
 市長賞

伊藤遥 桑山中学校 三年

防府市教育委員会教育長賞

浅川由佳 右田中学校 二年

山頭火ふるさと館長賞

松本菜美穂 桑山中学校 三年

佳作
 福田千英 山口大学教育学部附属山口中学校 二年
 松井乃愛 桑山中学校 三年

【高校生の部】
 市長賞

町田有里恵 防府高等学校 一年

防府市教育委員会教育長賞

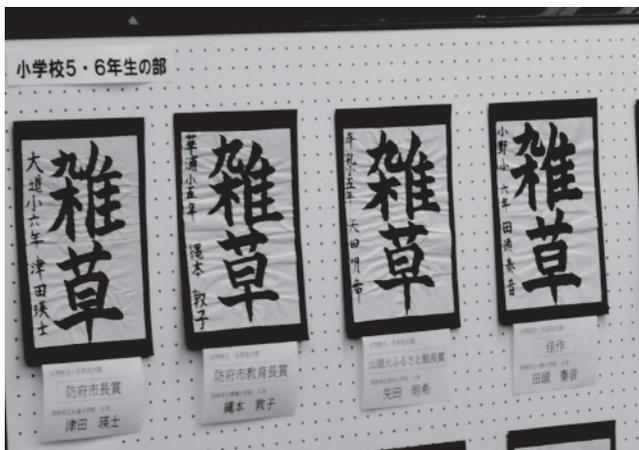
福田千紘 山口高等学校 二年

山頭火ふるさと館長賞

松田桃果 誠英高等学校 二年

佳作

浅川由衣 中村女子高等学校 一年



▲受賞作品展示

第五回山頭火ふるさと館 自由律俳句大会

募集期間

令和四年五月一日～十一月三十日

審査員

富永鳩山(『群妙』主宰)

久光良一(自由律俳人)

門田美和子(自由律俳句講師)

中村浩典(山頭火ふるさと館館長)

表彰式

令和五年二月十二日(日)

今回は全国から一般の部に一七二一点、子どもの部に一二〇八点の応募があり、そのうち十四点が受賞、一〇五点が入選となりました。

受賞作品は以下のとおりです。なお、入選作品は当館ウェブサイトに掲載しています。

一般の部

【最優秀賞】

丸い字でげんきかと一言母のハガキ
兵庫県 太田 純子

【防府市長賞】

君の傘なのに君の肩だけが濡れている
埼玉県 田沼 侑晟

【優秀賞】

十字を切る手が震えている 戦場
山口県 田中 流転

【佳作】

泣き濡れた硝子窓に線を三つ引く
沖縄県 天久 莉々愛

グラウンドに君がいるだけで春風

埼玉県 大野 美波

風の中の忘れ物そっと教える風鈴

京都府 金澤ひろあき

願いごと多い母を待つ初詣

埼玉県 佐々木美知子

卵焼きがおいしくて乗り切れる午後

広島県 松井 町世

子どもの部

【最優秀賞】

ほつとするあの角を曲がるとぼくの家
山口県 小5 徳田 俊

【防府市教育委員会教育長賞】

いそがしいって言いながら家事をするお母さん
奈良県 小6 中井 陽乃

【優秀賞】

金木犀とともに帰りのバスをまつ
山口県 中3 小山 綾香

【佳作】

パパとママのあいだであるくしあわせ
福島県 5才 浅野 真緒

ふるさと限定 満天の星空
山口県 中1 近藤 雪那

玄関をあけるとそこに家族のぬくもり
山口県 中1 野村 丞



▲受賞・入選作品展示の様子

山頭火カルタで 書き初め大会

開催日 令和五年一月七日(土)

大判の「山頭火いろはカルタ」と、令和三年度に防府商工高等学校の生徒のみなさんが総合実践の授業で作成されたかるたで遊びました。その後、取り札の中から好きな句を選び、短冊に書き初めをしました。まだ筆を持つたことのない方もいらつしやいましたが、みなさん一生懸命丁寧に書き初めをされていました。

山頭火句を書いた短冊は、令和五年一月八日(日)～二月十二日(日)まで市民ギャラリーに展示をし、来館者にもじっくりとご覧いただきました。



▲防府商工高等学校の生徒のみなさん作成のカルタ

今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和四年

九月 秋空はつきりお城は白く

昭和十五年九月
山頭火が住んでいた一草庵付近にあった松山城を詠んだ句です。すつきりと晴れた秋の空に、松山城の天守閣が白くはつきりと浮かんでる情景が浮かびます。空の青さと天守閣の白さが対比され鮮やかな様子が「はつきり」という言葉によって表現されているのが特徴的です。

十月 熟柿のあまさもおばあさんのおもかげ

昭和九年十月
前書きに「老祖母追憶」とあります。「あまさ」「おばあさん」「おもかげ」とア行やマ行が続き、全体的に穏やかな印象を与えます。母の代わりに自分を育ててくれた祖母とのあたたかな思い出が、熟柿の甘さをきつかけに蘇ってきているのではないのでしょうか。

十一月 いま写しませす紅葉が散ります

昭和八年十一月
現山口県山口市と萩市にまたがる長門峠を訪れた時に詠まれたものと思われます。「写しませす」とあるため、長門峠で写生をしているか、写真を撮っている様子を詠んだ句でしょう。

う。静止画として捉えられた情景と、絶え間なく舞い散る紅葉の様子が重なるように思い浮かびます。

十二月 さうぼうとしてゆふけむる月と人

昭和九年十二月
其中庵時代に詠んだ句。「さうぼう」は「蒼茫」と書き、ほの暗いことを意味し、「ゆふけむる」は、夕方食事の支度などで煙が上ることを表しています。家に人々が帰っていく様子の中に、「月と人」とどこか他人事のような言葉が、孤独感が広がっていくように解釈できます。

令和五年

一月 あたかなれば木かげ人かげ

昭和十年一月
一年で最も寒さが厳しい時期に詠まれた句で、寒い日が続く時期に小春日和のあたたかさがよりありがたく感じられたのでしょうか。「木かげ人かげ」から、影が出ている、すなわち日の光が感じ取れます。また、句の後半で「かげ」が繰り返されており句にリズムが生まれています。

二月 さそはれてまゐる節分の月がまうへに

昭和八年二月
節分の日の句。日記には小郡の句友国森樹くにしげ明に誘われ八幡宮の節分祭に出かけたことが記されています。「月がまうへに」とありますが、この年の節分の頃であれば八時ごろには月が昇っていたと考えられます。月を眺めながらゆく年くる年を想う様子が思い浮かびます。

三月 おもひでは菜の花のなつかしさを供へる

昭和八年二月
前書きに「亡母忌日二句追加」とあります。明治二十五年三月、山頭火の母親が自死したことは、山頭火の中で忘れられない心の傷として残り続けました。掲句からは、母との思い出の一場面に菜の花があつたことを思わせます。菜の花を供えて母を偲ぶ、あたたかさのある一句です。

図書・資料受け入れ報告

今年度九月〜二月までの間に寄贈いただいた資料をご紹介します。

寄贈

浅川紀代美様より『小説・種田山頭火 まだ陽のある脚』(又田竹栖)、太田和博様より『遍路行』(種田山頭火)、春陽堂書店様より『新編山頭火全集』第八巻(種田山頭火)、呉菲様より『種田山頭火俳句300』(種田山頭火)

御著編書

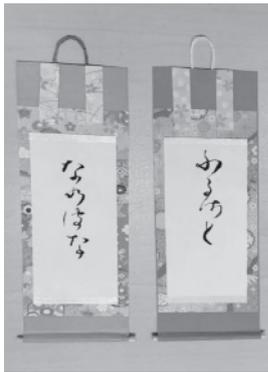
「青穂」事務室様『青穂』第四十六号・第四十七号、富永鳩山氏『群妙』第三十三号、吉田正孝氏『山頭火のあつかんべー』

くずし字ワークショップ

開催日 令和五年二月四日

企画展「防府市内山頭火頭彰の歴史」の関連イベントとして、初心者向けに開催しました。今回学んだのは変体仮名と呼ばれる明治時代以前に使われていた文字で、山頭火の日記や短冊などにも頻出している仮名文字です。現在はほとんど日本語の音一音に平仮名が当てられています。かつては一音に対して複数の仮名が存在していました。

たとえば現在の平仮名で「い」と書くものを、当時の人々は「ゐ」※(以)、「い」※(伊)など、様々なくずし字を用いて書いていました。当ワークショップではくずし字の一覧を参考に、山頭火の短冊の文字を読み取ったり、山頭火が書いた葉書を解読したりして、くずし字を通して山頭火の作品に触れていただきました。また、くずし字を実際に練習し、ミニチュアの掛け軸も製作しました。



▲参加者による作品
左から「なのはな」、
「ふるさと」

※学術情報交換用変体仮名(©独立行政法人情報処理推進機構・大学共同利用期間法人)を使用しています。

収蔵資料紹介

棕鳥会の句会資料「枯野」を取り上げる。

凡例

一、翻刻は原文どおりとした。
一、原文に誤字がある箇所についても原文どおりとし、右に(ママ)と記した。

枯野

- 1 馬子を連るゝ夕枯野溶礪爐が照れる (黒船)
- 2 橋落城の餘興あり積枯野夕 (蓮の門)
- 3 夕焼見て鎌研げり枯野風呂も焚く (蓮の門)
- 4 病院裏の下向後枯野果ては海に (黒船)
- 5 □野跡の荒れ田調べの吏が枯野来て (黒船)
- 6 普請塔に運ぶもの枯野人識れる (黒船)
- 7 枯野たゞに舞ふもの煙夕雨に (黒船)
- 8 …雨の枯野暮れがてに藪溢る鳥 (鳥城)
- 9 並木日照るうすれ日に枯野ひた馳せぬ(破句船)
- 10 工場裏の枯野川小舟捨て去まゝ (鳥城)
- 11 書庫閉しつ枯野戻りて夕風に (鳥城)
- 12 病窓徒事に暮るゝなり枯野遠に鴉 (竹堂)
- 13 句會待つ間たぎる湯枯野明け放つ (鳥城)
- 14 驛積荷の透場より遙か枯野見ゆ (竹堂)
- 15 枯野来しが国境の寂れ後船呼ぶ (鳥城)
- 16 枯野開墾火焚き居り遙か海見えて (鳥城)
- 17 …あるかなきかの枯野風葉黄明りして (山頭火)
- 18 枯野彼方の森落日餘憤我に立てり (碧松)

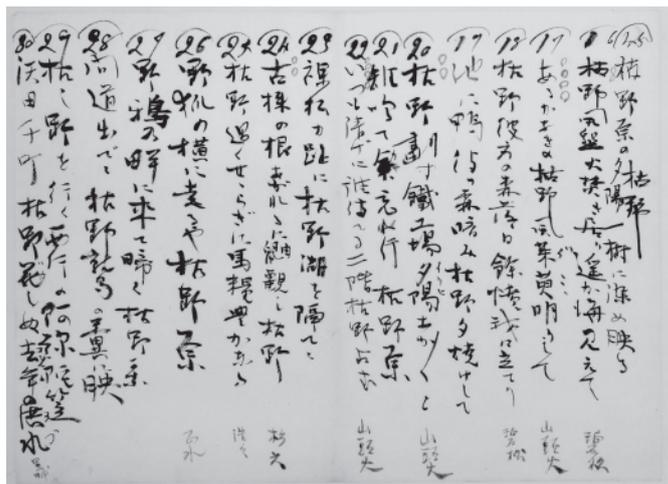
- 19 池に鴨待つ森暗み枯野夕焼けて (山頭火)
- 20 枯野劃す鐵工場夕陽あかくと (山頭火)
- 21 雉鳴て傘忘れ行枯野原 (山頭火)
- 22 …いつも清げに誰待てる二階枯野占む (山頭火)
- 23 裸松力趾に枯野湖を隔てゝ (山頭火)
- 24 古株の根あがれるに馳觀し枯野 (山頭火)
- 25 枯野過くせゝらぎに馬糧豊かなる (山頭火)
- 26 野狐の横に走るや枯野原 (山頭火)
- 27 野鴉の畔に来て啼く枯野原 (山頭火)
- 28 間道出でゝ枯野鷺の糞に映 (山頭火)
- 29 枯し野を行く西行の阿弥陀笠 (山頭火)
- 30 沃田千町枯野花しぬ去年の洪水 (星浦)
- 31 枯し野を吹まくりけ山の雲 (星浦)
- 32 乞食の亀煮る枯野夕焼けて (星浦)
- 33 詩箋教る枯野にわれは得も□せり (星浦)
- 34 『枯野より』と我日記一頁を増す (星浦)
- 35 枯野時雨鳥帰る森夕映えて (星浦)
- 36 枯原に目にたつものは小松かな (星浦)
- 37 火焚けば枯野霜白む獵犬も (星浦)
- 38 冬野続きの家並廣々大根杯干せる (星浦)
- 39 枯野廣々薄日して砂塵捲く一路 (星浦)
- 40 …晒し場ありて布干せり枯野片照りす (星浦)
- 41 枯野茶屋場訛り人寄は納税の衆 (星浦)
- 42 …庭の樹肌滑らなり枯野日照り雨 (星浦)
- 43 道普請休日あり枯野朝月痕が (星浦)
- 44 ココラ杣處冬野遠見に住ひ居り (星浦)
- 45 枯野の礫夢の歩哨に敵近し (星浦)

(解説は次頁へ)

解説 山頭火が所属していた防府の俳句結社「椋鳥会」の句会資料。大正二十一年十一月のものとしてされる。9番の破句船(久保白船)や16番の碧松(江良碧松)等、のちに山頭火とともに『層雲』で活躍する人物の名前も見える。なお当時すでに三人とも『層雲』への初入選を果たしている。30番の星浦は柳星甫か。

採点表は残っていないが、句の上の「・」を数えると、多い順から山頭火十点、不泣子(浴永不泣子)七点、鳥城五点となる。

26「野狐の横に走るや枯野原」のように定型の俳句もあるが、得点の多い句はどれも五・七・五の定型を破った句である。のちに『層雲』支社にもなる「椋鳥会」で新傾向の俳句が好まれたことは、この採点結果からもうかがえる。(山頭火ふるさと館学芸員 高張優子)



▲句会資料「枯野」2枚目

今後の企画展情報

企画展「俳句を聴く 山頭火とオノマトペ」

会期 令和五年四月十四日(金)

～七月二日(日)

山頭火の自由律俳句は、日本語の「音」を効果的に使うことで、五・七・五という音数に よらない独特のリズムを生み出している句や、より感覚に訴えるような句が多く存在します。今回の企画展では、山頭火の俳句のうち、オノマトペをはじめと

する音にこだわって詠まれたものを紹介します。



企画展「山頭火に出会った人々 第二弾

会期 令和五年七月七日(金)

～令和六年一月八日(月)

山頭火が自由律で頭角を現し始めたころに出会った人物二人を紹介します。生涯精神的・経済的に山頭火を支え続け、山頭火が最も頼りにしていた木村緑平と、同郷の俳人として俳句を通じて交流を続けた兼崎地橙孫を取り上げ、二人と山頭火の友情を掘り下げます。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前十時～午後六時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで)

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料

無料

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅てんじんぐちから約一・五km

まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)

無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報

第10号

令和5年4月1日発行

編集・発行

一般社団法人

防府観光コンベンション協会

山頭火ふるさと館

747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113